Higuchi, Tomoya Miyamura, Eiichi Suematsu: Sicca syndrome in patients infected with human immunodeficiency virus-1, Modern Rheumatology 2002, 12(4), 333-337
(和文)
1)中尾隆介、山本政弘、堀田飛香:HIV 治療遂行のためのモニタリングシステムの進展 HIV-1 逆転写酵素活性測定系確立の試み、医療、2004、58(2)、94-95
2)木村哲,福武勝幸,岡慎一,高松純樹,内海眞,白阪琢磨,藤井輝久,山本政弘:HIV 感染症に対する Amprenavir (KVX — 478:APV)の臨床試験成績、化学の領域、2002、18(8)、97-108
3)中尾隆介、山本政弘、福田光枝:遺伝子型薬剤耐性検査の改善の試み、医療、2002、56(12)、732-733
4)木村哲、満屋裕明、味澤篤、五十嵐謙一、伊藤章、岩本愛吉、内海真、岡慎一、小池隆夫、白坂琢磨、高田昇、高松純樹、根岸昌功、日笠聡、福武勝幸、松下修三、安岡彰、山本直樹、山本政弘、山元泰之:HIV 感染症「治療の手引き」<第 7 版>、2003 年 11 月、HIV 感染症治療研究会事務局、東京
5)山本政弘:「HAART 療法の考え方と適応」、2003、Progress in Medicine 23(9), 9-13
6)鄭湧, 池松秀之, 山本政弘、干々和勝己, 有山巌, 李文, 林純, 白井洸, 柏木征三郎:HIV 感染者に対する多剤併用療法による高ガンマグロブリン血症の改善についての検討、感染症学雑誌、2001、 75(7)、535-540
7)吉崎和幸、小池隆夫、佐藤功、荒川正昭、河村洋一、内海真、白阪琢磨、高田昇、山本政弘、上田良弘、 小西加保留、宇野賀津子:日本のエイズ、その医療体制の現状と問題点、日本エイズ学会誌、2000、2(3)、205-212、

木村博和

(欧文)
1) Shuji Hashimoto, Miyuki Kawado, Yoshitake Murakami, Seiichi Ichikawa, Hirokazu Kimura, Yoshikazu Nakamura, Masahiro Kihara and Kazuo Fukutomi: Numbers of People with HIV/AIDS reported and Not reported to Surveillance in Japan, J.Epidemiol, 2004, 14(6), 182-186
(和文)
1)橋本修二、福富和夫、山口拓洋、松山 裕、中村好一、木村博和、市川誠一、木原正博:HIV 感染者数と AIDS 患者数のシステム分析による中長期展望の試み、日本エイズ学会誌、2002、4(1)、 8-16
2)市川誠一、木原正博、木原雅子、木村博和:HIV 感染症疫学の現状、化学療法の領域、2002.4、18(4)、495-501
3)山口拓洋、橋本修二、川戸美由紀、中村好一、木村博和、市川誠一、松山 裕、木原正博、白阪琢磨:エイズ治療の拠点病院における HIV/AIDS の受療者数、日本エイズ学会誌、2002、4(3)、 91-95
4)市川誠一、木村博和、鬼塚哲郎、松原 新、佐藤未光、井戸田一朗:MASH による啓発活動、総合臨床、2001.10.1、50(10)、2805-2810.

Ⅱ．分担研究報告

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業
男性同性間のHIV感染予防対策とその推進に関する研究

東京地域における男性同性間のHIV感染予防対策とその推進

分担研究者　市川誠一[1)]、佐藤未光[2) 3) 4)]
研究協力者　今井敏幸[2) 3) 5)]、張由紀夫[3) 5)]、河邊宗知[2) 3)]、高橋長久[2) 3)]、橋本謙[2) 3) 6)]、木村博和[7)]
1) 名古屋市立大学大学院看護学研究科、2) MASH 東京、3) Rainbow Ring、4) 東京大学医科学研究所先端医療研究センター感染症分野、5) 財団法人エイズ予防財団リサーチレジデント、6) 都立農業高等学校、7) 横浜市衛生局

研究要旨

東京地域のゲイコミュニティに対する啓発普及を目的として、当事者参加による予防啓発活動・啓発資材の開発とその普及について試行した。成果は以下のとおりである。

1) 地域ボランティア（CBO)、イベント企画、メディア、商業施設等に所属する当事者との協力体制を推進するために、Rainbow Ring 及び MASH 東京との連携を継続し、東京を中心とした予防啓発活動の展開を図った。
2) Rainbow Ring はコミュニティ・ネットワークを構築し、それを活用した情報収集及び予防啓発プログラムを開発し実行した。また、MASH 東京は　医療・検査などの専門的な情報をコミュニティに還元するための資材の作製をした。
3) コミュニティセンター「akta」は予防啓発活動の拠点であると同時に、コミュニティセンターとしての利用も増え、来場者には啓発資材など多数の情報を提供しており、啓発活動とコミュニティとの相互連携を推進している。4 月から 1 月末までの延べ来場者数は 6,612 名となった。
4) 新宿 2 丁目のバーに毎週コンドームアウトリーチを行う「デリヘルプロジェクト」は、コンドーム以外の資材の配布、Rainbow Ring の広告塔としての機能を併せ持ち、若いスタッフの受け入れ口にもなっている。配布人員は各回6-12人、133-145軒の店舗に対し、今年度実施した43回で49,771個(1,160個/回）のコンドームを配布した。
5) 3 年目となる「セーファーセックスキャンペーン」では、世界エイズデーをはさむ 1 ヶ月間(11 月 26 日～12 月 25 日)に開催されたクラブイベントと連携し、37 イベントの参加者に向けてオリジナル啓発キット（コンドーム＋ステッカー）を配付した。
6) 東京近県を含むおよそ 80 に及ぶハッテン場等の商業施設との連携について、昨年に引き続き施設オーナー等を対象とした脱法ドラッグに関する講習会およびポスターの配布に加え、今年度は利用顧客に対する意見交換会「カフェ・ハッテン」を定期的に開催した。また、そこで収集した意見をもとに啓発資材「FUCKS!」を作製し、商業施設に配布した。
7)「go-com」（東京都との協働）は 10 代から 20 代前半の若いゲイ・バイセクシャルの男性を対象とした少人数（6～10 人）形式の HIV/STD 勉強会で、月例で開催した（4 月-9 月)。
8) 季刊紙「S/H」は、感染の動向、検査キットについてなど、タイムリーな情報を掲載し、バーおよびハッテン場等商業施設などに配布した。
9)「Living Together 計画」は NPO 法人「ぷれいす東京」との協働事業である。写真展、感染者の手記のリーディングの会、Living Together Lounge（音楽とリーディングの夕べ）等を定期的に開催し、「感染者と共に生活する」を視点に入れながら予防啓発を推進している。

訴求性のあるデザイン・内容の啓発資材の開発、コミュニティに見える予防啓発活動を展開するためには、コミュニティ内のキーパーソンあるいは CBO の協力や信頼関係の構築が必要不可欠であるが、コミュニティセンター「akta」は、コミュニティメンバーと啓発活動との相互連携を図るための重要な場となっている。「akta」が開設されて 1 年以上経過したが、利用や認知も着実に向上しており、今後も「akta」が予防啓発活動の拠点となると同時に求心力を強め、より多くのキーパーソンが集い連携の構築のもとに、さらに規模の大きな啓発活動が展開できることと期待している。

A. 背景と目的

厚生労働省エイズ発生動向における男性同性間の性的接触による HIV 感染者・AIDS 患者報告数はいまだ増加が続いており、特に、近年の特徴として、東京およびその近県での増加に加え、近畿ブロック（大阪)、東海ブロック（愛知)、九州ブロック（福岡）などの都市部での増加が目立ってきている（図 1)。これらの地域ブロックでの報告

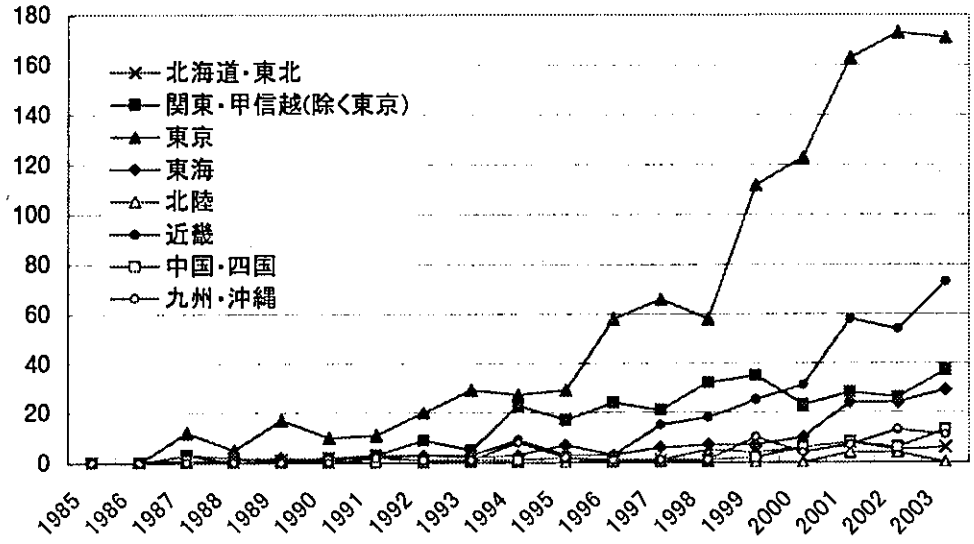
数は、2001年末累計が1998年末累計のほぼ2倍を示しており、最近3年間での急増が示されている。また、市川ら、内海らは、東京、大阪、名古屋地域でMSM (Men who have sex with men) のHIV受検者における陽性率は2-3%であり、梅毒抗体陽性率も高いことから、HIVを含む性感染症（STI）に対する有効な予防対策が必要であることを示唆している。

HIV/AIDSおよび他のSTIがMSMの間で流行してきた背景として、1）これまでの国民向けエイズ対策はMSMに訴求効果を示していない、2）これまでのMSM向けの啓発資材開発や啓発普及は十分でなく、効果的なエイズ対策がない、3）保健所等の無料HIV抗体検査・相談等の普及および受検者への性感染症予防介入が十分でないことがあげられる。

わが国の男性同性間のHIV/AIDS流行防止に有効な対策を構築するには、1）MSMに訴求性の高い啓発資材および有効な普及方法の開発、2）予防啓発が届きにくい、避けてしまう層に対して予防意識を啓発する資材とその普及方法の開発、3）ハッテン場等の商業施設におけるコンドーム使用を促進する効果的な啓発手法の開発、4）ゲイ・NGOやゲイコミュニティと連携した有効な啓発普及体制の構築、5）地域におけるMSM対象のエイズ施策を構築する行政-NGO間の連携推進、6）HIV/STI検査機会の拡大とセクシュアリティを解した受検時の予防介入方法の開発、などを早急に検討する必要があると考える。

本研究は、日本国籍男性の同性間性的接触によるHIV/AIDS報告数の超過半数を占めている東京およびその近県地域において、MSMを対象としたHIV/STI感染予防対策を推進すべく、訴求性のある啓発資材および実効的な普及方法の開発を目標としている。研究初年度は、東京のMSMへの予防啓発をコミュニティベースで取り組む試行期として、1）当事者参加によるプロジェクトの構築、2）HIV/STI感染予防啓発の方向性の検討、3）啓発資材の開発とその普及の試行、4）ハッテン場等の商業施設との連携の構築、をおこなった。2年度は、1）新宿2丁目を中心にコンドーム普及を図る（バー、イベントでのデリヘルボーイによるアウトリーチ）、2）ハッテン場における啓発プログラムの具体化（オーナーとの連携構築、ビデオ、ポスターによる啓発）、3）若者向けのSTD勉強会、4）グループレベルでの予防介入としてSTDワークショップ開催、5）個人レベルでの予防相談事業の検討、6）STD医療機関の紹介などの医療連携、をおこなった。そして最終3年度は、1）コミュニティセンター「akta」を拠点とした予防啓発活動の推進と「akta」の認知の向上、2）新宿2丁目を中心としたコンドームと啓発資材のアウトリーチの継続、3）ハッテン場における啓発プログラムの（オーナーへの啓発および、顧客向け啓発資材の開発）、4）若者向けのSTD勉強会、5）医療・検査情報の広報資材の開発、6）他のNPOとの協働による一連の予防啓発イベントの開催、などを試行した。

図1 日本国籍男性同性間HIV感染者の地域ブロック別・発生動向



B. 研究方法

1. 研究体制

本研究を始めるにあたり、地域ボランティア、イベント関係者、メディアや商業施設等の従事者などからなる地域ボランティア団体（CBO）として Rainbow Ring を結成し、研究協力体制の構築を図った。啓発資材開発およびその普及を Rainbow Ring が担当し、各自が有するネットワークを活用しつつ、既存のゲイ NGO、ゲイメディア、ゲイビジネス等の関係者から協力を得るなどによってネットワークを構築し、普及促進の方法を探ることにした。また、本研究で試行する啓発資材、普及方法の有効性についての評価は研究者が担当し、さらに地域での MSM を対象とするエイズ施策の継続性のために東京および近県の行政との連携を図ることにした。

東京における予防介入に関しては、2000 年から厚生労働省 HIV 社会疫学研究班 MSM グループ（分担研究者市川誠一）の研究において、MASH 東京が結成され、幾つかのプログラムが検討されてきた。MSM に対する予防介入に関する研究は、本年度から本研究班に整理されることになったため、これまで MASH 東京が検討し実施してきたプログラムを加えて、東京地域での予防介入について検討する。

また東京では、エイズが問題となった当初からゲイ NGO が様々な活動を展開してきている。本研究は、今なお増加が続いている MSM における HIV 感染に対して、新たにその予防啓発の促進を目標として実施するものである。これまでの既存のゲイ NGO の成果を損ねることなく、Rainbow Ring を通じてこれらの NGO と協力連携しつつ予防対策の有り方を検討したいと考える。

2. 予防啓発計画

1）第 1 次予防啓発計画(2002 年)

ゲイコミュニティの様々な分野に従事する当事者との協力体制は、各自のコミュニティネットを活用した情報収集が可能となり、啓発資材、その普及方法についても多面的な視点から検討を加えた。Rainbow Ring では図 2、図 3 に示すような啓発活動のプロセスをとった。そのコンセプトは、コミュニティ全体の啓発→施設との連携→施設利用者への啓発である。これは、1）施設利用者への直接の啓発は施設との関係構築なしには困難である。また 2）施設への直接の啓発は、場合によっては施設への風評（例えば、施設で HIV 感染が起こっているとのうわさ）を招くことが想定され、必ずしも施設の利点とならない。このため、MSM を対象とした HIV/STI 感染予防啓発を推進することの必要性をゲイコミュニティ全体に広報することを最初のステップとすることにした。その方法としては、ゲイパレードでの Rainbow Ring の広報、ゲイ雑誌による啓発の告知などが提案され、そこで提示する内容や資材、方法が工夫された。

具体的には、HIV 感染予防啓発を進める上で、1）新たに HIV/STI 感染予防の活動をする Rainbow Ring について周知する、このため 2）オリジナルロゴを作成し、ゲイパレードで広報する、3）MSM における今日の HIV 感染状況をコミュニティに向けてその情報を提示する、4）新たなイベントを企画するよりも既存のイベントと協力関係を構築することで啓発普及の効果を図る、5）ゲイ雑誌への広告告知によりメディアを介したコミュニティレベルの広報を行う、6）啓発資材はオリジナルのものを作成しその訴求性を図る、7）コミュニティ全体への普及後にハッテン場等の商業施設を含めて啓発を開始する、などを計画した。

ハッテン場等の商業施設に対する啓発は、まずは経営者との協力関係が構築できるようにアプローチを工夫し、一部の施設に偏ることなく首都近郊の施設を全て網羅するように配慮した。

2）第 2 次予防啓発計画(2003 年)

初年度に結成された Rainbow Ring は、コミュニティとの連携をさらに深めるために協力体制の構築を図り、コミュニティネットを活用した情報収集、啓発資材およびその普及方法の開発を検討した。そのコンセプトは昨年同様、コミュニティ全体の啓発→施設との連携→施設利用者への啓発である。MSM を対象とした HIV/STI 感染予防啓発を推進することの必要性をゲイコミュニティ全体に広報することを引き続き行い、さらに具体的なプログラムとして以下のことを計画し実施した。

1）HIV/STI 感染予防の活動をする Rainbow Ring について周知する、2）新宿 2 丁目のバー等の商業施設と協力連携し、コンドームアウトリーチを

行う、3) アウトリーチを実行するためにデリバリーヘルスボーイ（デリヘルボーイ）を結成する、4) 今日の HIV 感染状況をコミュニティに向けてその情報を提示する、5) 既存のイベントと協力関係を構築し啓発普及の効果を図る、6) ゲイ雑誌への広告告知、プログラム記事掲載によりメディアを介したコミュニティレベルの広報を行う、7) 啓発資材は本年もオリジナルのものを作成しその訴求性を図る、8) ハッテン場等の商業施設との連携として新たなプログラムを提供する、9) コミュニティセンター「akta」の開設の周知を図り、その活用をコミュニティに提示する、10) 東京近県の MSM 対象の啓発活動に連携する、などを計画し実施した。

3) 第 3 次予防啓発計画（2004 年）

今年度はRainbow Ringの啓発普及活動のコンセプトである、コミュニティ全体の啓発→施設との連携→施設利用者への啓発、を念頭に置きつつ、その三者がバランス良く実施されるように計画した（図 2)。前年度に開設されたコミュニティセンター「akta」は、予防啓発活動の拠点であると共に、コミュニティセンターとしての利用を推進することで、1）HIV や STI 等の問題に無関心な層を引きつける、2) ゲイコミュイニティ内のキーパーソン（アーチストやモデル、ゲイビジネス関係者などコミュニティ内で活躍している人）とのネットワークを形成する、ための場として重要であり、活用を促進して認知を高めることを引き続きおこなった。また、「akta」を拠点とした予防啓発活動がコミュニティから「見える活動」になるように配慮しつつ、具体的には以下のプログラムを計画し実施した（図 3)。

1)コミュニティセンター「akta」の周知を図り、利用を促進する、2) コンドームアウトリーチのためのデリヘルボーイの活動を継続し、新宿 2 丁目の商業施設との協力関係を確立する、3) 既存のイベントと協力関係を構築し啓発普及の効果を図る、4) ゲイ雑誌やインターネットなどのメディアを介して Rainbow Ring の活動の周知を図る、5) ハッテン場等の商業施設との連携を継続しつつ、利用者への予防啓発をおこなう、6) HIV の感染動向や検査情報などをコミュニティに向けて発信する、7) 啓発資材・広報資材は引き続きオリジナルのものを作製し訴求性を図る、8) 既存の NPO やキーパーソンとの協働による予防啓発活動の広がりを図る、などを計画し実施した。

図 2 Rainbow Ring の結成と啓発活動のプロセス

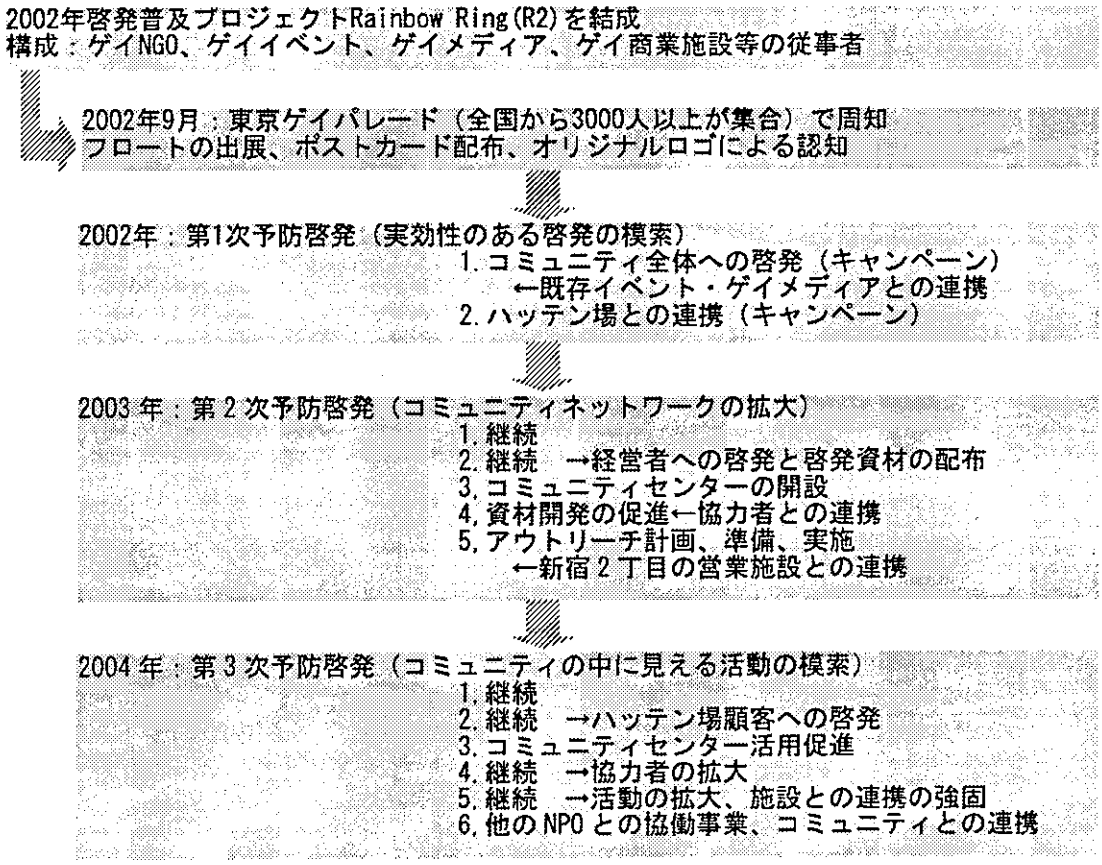
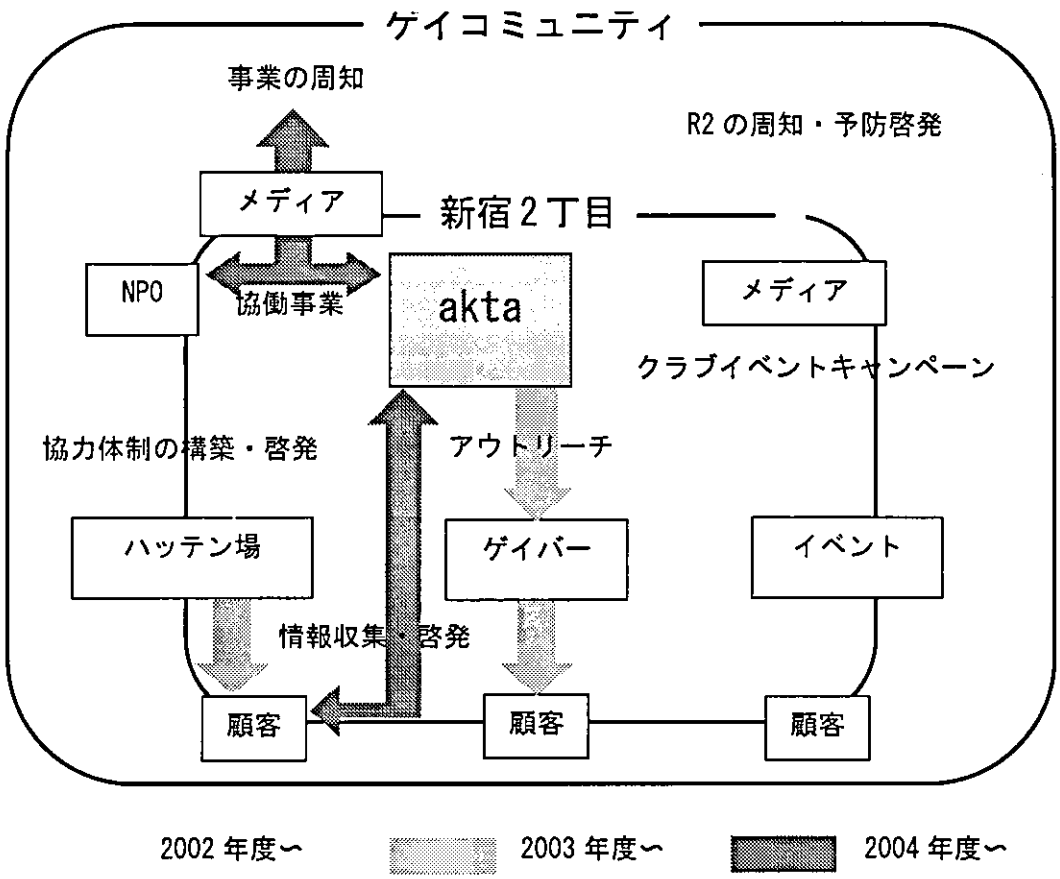


図 3 Rainbow Ring による啓発活動プロセスの内容



3. 倫理面への配慮

男性同性愛者／両性愛者は、社会からの偏見・差別が強く、啓発活動を進める場合はこれらを配慮する必要がある。このため、本研究では、当事者と連携して調査、啓発等の内容を検討し、対象者を含めゲイコミュニティへの倫理的配慮を保ちつつ研究を進める。コンドーム啓発プログラムをゲイコミュニティに浸透させるためには、バー、クラブ、ハッテン場等の施設の協力が必須で、研究の主旨等を説明し、施設経営者等との相互理解、信頼関係を構築している。

C. 研究結果

1. MASH 東京による予防啓発普及

1) 医療連携

ゲイコミュニティにセクシャルヘルスの向上に関する情報を提供することを目的に、MSM のための医療や検査などに関する情報を掲載したフライヤー「S/H」を季刊紙として作製した。今年度は昨年度のデザインに対する反響から、一見 AIDS/STI やゲイとは無関係に見えながら、インパクトのあるキャッチコピーとデザインを工夫した。第 3 号は 2 万枚作製した。

第 3 号配布実績

新宿 2 丁目バー	計 3,000 枚
クラブイベント	11 月 27 日-12 月 23 日の間に開催された 33 のイベントに計 6,200 枚
関係機関	ぷれいす東京、LAP に 200 枚、計 400 枚
akta	残りの約 1 万枚を資材として配布

2. Rainbow Ring による予防啓発普及

1) コミュニティセンター「akta」

コミュニティセンター「akta」は、MSM を対象としたコミュニティベースの予防啓発普及の拠点を目的に 2003 年 8 月設立された。運営はエイズ予防財団の「男性同性間の HIV/STI 感染予防に関する啓発事業」を受託して Rainbow Ring がおこなっている。ゲイコミュニティに根ざした予防啓発活動をするために、また無関心層を呼び込むためにもアクセスのしやすさを考え、ゲイ商業施

設等の集中している新宿2丁目に設立した。開設にあたり、入りやすくくつろぎやすい雰囲気を考え、また展示も可能なスペースとした。事務局員が連日交代で勤務し、年末年始を除く毎日 16 時から 22 時まで開場している。

akta は以下の活動をおこなっている。

①情報提供（予防啓発に関わる情報およびコミュニティ情報）
②リソースの開発・紹介
③啓発資材配布の拠点（資材の作製・梱包・配送・アウトリーチ等）
④HIV/AIDS に関わる人たちの利用（ミーティングや研修など）
⑤学習の場（ワークショップや講演会など）
⑥コミュニティスペース（ドロップインスペース・展示スペース・打ち合わせやミーティングなど）

今年度の akta への総来場者数の推移は以下のようである。夏にイベントが多いため来場者数は増えるが、年間を通して増加している。

akta 来場者数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
634	586	522	622	894	793	699	609	666	587

来場者に対するアンケートによる調査（回答数 275）は以下の結果であった。

・10 歳代後半から 30 歳代の来場者で 95%を占め、40 歳代まで含めるとほぼ 100%である。
・ゲイ男性の来場者が 70%で、その他はバイ・ヘテロ男性、レズビアン・ヘテロ女性および、決められない、で三分している。
・居住地は東京都が 60%で、その近県からが 30%である。
・認知は口コミが 55%で最も多く、インターネット、ゲイ雑誌が続く。
・自由記述欄の内容では、akta の雰囲気についての好感（落ち着ける・ステキ・清潔・親切・入りやすい等）と、再来場したいとの意志がほとんどであった。また、このようなセンターの存在を歓迎（有意義・生産的・コミュニティのために必要等）、啓発資材に触れたことの感想（知識を得て良かった・知りたいことがわかった・はじめて知った等）、予防啓発活動への関心や応援（頑張って・自分も役に立ちたい等）も多く見られた。入り口のわかりにくさの指摘もいくつか見られたため、新たに看板の設置をおこなった。

資材の消費はコンドームが最も多く、月に 50ー100 個の消費であり、その次に装丁がしっかりした読み物系のパンフレット（Living Together や my first safer sex など）が月に 20ー40 冊ほど消費されていた。また、コミュニティ情報紙「二丁目瓦版」の消費も多かった。以下、「保健所案内」「カウンセリングの案内」「セーファーセックスガイド」「HIV 陽性者の受診の手引き」「夜間検査室案内」などであった。消費が少なかったのは、「電話相談」の案内であった。

akta は様々なミーティングや展示会などに利用されているが、今年度おこなわれた主なものは、

・ジャンジ個展（3/28-4/4）
・北丸雄二講演会（4/11）
・新宮健治グループ展（5/20-30）
・にじ座談会（7/14、8/4, 11, 18）
・GUTS「ひまわり」上映会（8/21）
・Living Together 展（LT 計画）（8/22-9/5）
・ささやきカフェ（LT 計画）（8/27, 29）
・夏のテーブルトーク（LT 計画）（8/25）
・竹之内祐幸写真展（9/16-30）
・下村しのぶ写真展（10/17-31）
・はばかりシネマ上映会（11/21-23）
・薔薇展（12/17-28）
・イクときに見える風景画展（1/16-31）

である。展示をきっかけに多くのアーチストと Rainbow Ring とのコネクションが構築され、活動に関わっていただけることが多いのは特筆すべきである。直接予防啓発に関わりのない内容の展示であっても、アーチスト自身が啓発資材や啓発活動に触れるきっかけとなっていると思われる。

来場者から相談があった場合には、akta にある資材や、相談機関の紹介を原則にしている。相談内容として多いのは「HIV」に関して（特に「HIV 検査機関」「HIV 感染者自身のケア・サポート」「感染経路」「病気そのもの」「感染者周囲のケア」など）で、ついで「性感染症」（特に「検査機関」「病気そのもの」「治療方法と治療機関」「感染経路と予防」など）、「脱法ドラッグ」（特に「作用」「健康への被害」など）であった。最近の傾向として、感染直後の不安や医療機関についての相談、HIV の治療についてなど、専門的な相談が増えてきた。akta の認知が高まると同時に、相談に対するニーズもより個人的・専門的になってくる可能性があると思われる。

2) デリヘルプロジェクト

新宿2丁目における重要な構成要因であるバーおよびクラブの顧客や従業員を対象に、コンドームをきっかけとして AIDS/STI やセーファーセックスを身近に意識してもらうことを目的に、コンドームアウトリーチをおこなっている。これはも

ともと自主的にコンドームの無料配布していた、新宿2丁目の商業施設による団体「project com.」との協働事業であり、Rainbow Ringが人的提供およびコンドームの作製・提供をしている。

ボランティア「デリヘルボーイ」(delivery health boys の略)により、毎週金曜日にアウトリーチをおこなっている。

今年度作製したコンドームパッケージは20種類であった。また、今年度は43回(うちイベントにおける配布を2回)のアウトリーチで、1回あたり903ー1,779個、のべ49,771個のコンドームを配布した(イベントを除く)。配布したボランティアは各回6ー12人であり、のべ399人であった(イベントを除く)。配布店舗数は1回あたり133ー145軒で、のべ6,090軒になる。協力店舗数は徐々に増加傾向にあった。

デリヘルの活動が定常的におこなわれるために徐々に認知も向上し、店舗との交渉もスムースになり、デリヘルボーイによる各店舗からの意見や情報の収集も見られるようになった。また、コンドーム以外の啓発資材の配布も可能となった。

デリヘルプロジェクトはゲイ雑誌等のメディアでも取り上げられ、認知の向上と共にRainbow Ringの広告塔となり、「見える予防啓発活動」を推進する重要な役割を担っている。

3) ハッテン場プロジェクト

2003年度は主にハッテン場との関係性を築くことに重点を置き、ハッテン場経営側へのアプローチが中心であったが、2004年度はハッテン場顧客への直接的なアプローチを盛り込んだ。

(1)『つけてヤろうぜ』ポスター配布

ハッテン場のエロチックなイメージや、セックスのイメージを損なわずに、視覚的にコンドームが印象付けられる狙いである。昨年度に引き続き第3段である。9月に78軒のハッテン場に配布した。

(2) 講習会・・・9月24日

ハッテン場が直面する問題の中からタイムリーで話題性のあるものを提示し、参加者(オーナー及び関係者)の意識を高め、理解を深める目的で開催した。今回も最も行政の介入が懸念される問題ということもあり「脱法ドラッグ規制について」と、「東京都のHIV感染の状況」について、東京都福祉健康局から2名の講師を招いて開催した。

2004年11月9日に都庁の会議室で開催し、各ハッテン場に案内状を送付して参加者を募った。参加者は3名であり、参加者の声は「大変に有効な内容だった」とおおむね好評だったため、広報の方法・開催場所・時間について再検討を要する。

(3) café hatten

ハッテン場やハッテンに関するテーマで参加者の意見を壁に貼ってもらい、それをもとに談話をするカフェ形式の座談会である。7月より毎月第三土曜日にaktaで開催した。フライヤーを作製し、ハッテン場の関係者から利用者まで幅広く参加をよびかけた。参加者にアンケートを記入していただき(5回の開催で57の回答)、ハッテン場に関するニーズや情報の収集をおこなった。参加者の意見や、アンケートの内容は、下記の「Fucks!」の題材に活用した。今後はインタビューなど実施して、さらにハッテン場に関する意見を集めていく予定である。

(4) 季刊紙「Fucks!」

ハッテン場の顧客を対象とした、ハッテンスタイルに関する情報誌。ハッテン場でのセクシャルヘルスの向上を目的に、café hattenで得られた情報や、把握できたニーズに応える形で構成している。第一号は1月中に、92店のハッテン場に25部ずつと、デリヘルで各店舗に2部ずつ配布した。

4) go-com(東京都の委託事業として協働開催)

10代から20代前半の若いゲイ・バイセクシャルの男性を対象とした座談会形式の勉強会である。

各回、スタッフ手作りの小冊子を配布し、決められたテーマに沿って自由に発言や意見交換をする時間と、STIについてスタッフからのレクチャーの時間を設けた。ゲイライフやセックスライフについて、自由に発言したり同年代の人の意見を聞くことで、自分で考えて判断する力をサポートすることが目的である。勉強会中に質問が出たり、明らかに誤った情報が出たときは、医療スタッフが対応をした。

広報はインターネットニュースやゲイ雑誌に掲載、フライヤー、またはホームページ上で行った。

go-com. 第二期

日時	テーマ	今月の病気	参加人数
4月10日	初めましてgo-com!です。	梅毒	12人
5月8日	5W1H	クラミジア	9人
6月12日	今度…生む	毛じらみ症	8人
7月10日	彦星×彦星	トリコモナス	11人
8月14日	夏の野外はデインジャー	コンジローム	10人
9月11日	飲まーナイトタウンFeat二丁目	B型肝炎	9人

5) セーファーセックスキャンペーン

12 月 1 日世界エイズデーの前後 1 ヶ月間（11 月 26 日-12 月 25 日）に、都内で開催されたゲイおよびゲイミックスイベントにおいて、キャンペーングッズを配布した。今年のキャンペーングッズはステッカーとコンドームがセットになったもの。今年もセーファーセックスを随所で呼びかけるキャラクターとして「bumpy!」を採用した。配布方法はイベントで手渡すフライヤーセットに折り込んでいただいた。

33 のイベントで、4,000 個のキャンペーングッズを配布した。また、「bumpy!」の着ぐるみを作製し、一部手渡しで配布した。2 つのイベントに着ぐるみとデリヘルボーイが出張して、610 個のコンドームを手渡しで配布した。

6) Living Together 計画

「感染者と共に生活する」をテーマに NPO 法人ぷれいす東京が昨年度より開始したプロジェクトである。「感染者と共に生活する」とう視点は予防においても重要なテーマであり、今年度から Rainbow Ring も協働していくことになった。予防活動は HIV 陰性者を対象にしていて陽性者を排除しているように感じるという事を聞くことがある。予防については、予防医学の視点から見ると、HIV に感染することを防ぐための知識や意識を普及する第 1 次予防、HIV 感染を早期に検査して早期に治療することで重症化を防ぐ第 2 次予防、陽性者の社会生活を支援する第 3 次予防がある。すなわち、予防活動は感染予防のみならず、陽性者を含め HIV と共に生きる視点をもって取り組むことが望まれる。この LT 計画では以下のことを行った。

- 写真展／感染者のレターの展示（8 月 22 日-9 月 5 日）
- イベント／感染者や、その友人や家族の書いた手記のリーディングの会／カフェ等（8 月 22、25、27、29 日、9 月 4、5 日）
- Living Together Lounge（音楽とリーディングの夕べ）：クラブイベント会場・ミュージシャン・ゲイ著名人とのコラボレーションで実現（9 月より毎月第 3 日曜日）
- バッジによるカンパ
- Living Together 冊子およびパンフレットの作製
- ホームページの作製（http://www.living-together.net）

7) ホームページ

MASH 東京、Rainbow Ring とも、独自のホームページを作り、運営している（http://mashweb.com/tokyo/、http://www.rainbowring.org/）。ホームページは予防啓発の情報提供に加え、我々の活動をコミュニティに紹介し、還元していくことを目的にしている。キャンペーンの告知や協力への謝辞、または入手した予防啓発の情報をアップしている。また、アクセス数を増やすために、リレーエッセイを載せる、掲示板を加えるなどの工夫をし、リンクも受け付けている。今年度は新規に担当者が決定し、ホームページもリニューアルした。

D. 考察

東京都新宿 2 丁目内でコミュニティセンター「akta」を運営するにあたり、akta に対する様々な期待やニーズが予想されたが、限られたスペース・予算・人的資源をより有効に活用することをまずは念頭に置いた。特に「無関心層」を呼び込むことに重点を置き、開かれたコミュニティセンターとしての機能を充実させることを優先した。その一例として、ゲイコミュニティの中で活躍しているアーチストによる展示会を開催し、著名人と講演会や映画の上映会などを行ったことが挙げられる。また、Rainbow Ring 企画の展示会でも、多くのアーチストから協力を得た。これらの企画を通してキーパーソン自身も我々の活動に理解・興味を示し、活動に参加する機会を提供することになった。展示をおこなったアーチストからは、啓発資材を作製するにあたって積極的な協力があった。akta は啓発活動とコミュニティとの連携の場となり、活動を広げていく役割を果たしているといえる。

akta の認知に伴い、より多くの人が来場すると同時に、クライアントのニーズはますます個人的、かつ専門的になりつつある。クライアントのニーズに応えるためには、今まで以上の資材の準備と、医療・相談など各機関との連携が必要である。

デリヘルプロジェクトでは、若年層のボランティアスタッフ（20 歳代前半）が活動の中心となっている。彼らの多くはパンフレットやインターネットなどの募集広告を見て、「かっこいい」「楽しそう」というイメージからアプローチをしてきている。1 年以上の活動を通してスタッフの出入りもあったものの、毎週の無償の活動が維持できていることは予想以上の成果であった。多くのスタッフのモチベーションの維持は、バーなどへのアウトリーチが楽しい経験となり、デリヘルの活動を通してゲイコミュニティに参加できることに起因している。また、予防啓発活動に参加することが、彼ら自身も啓発される機会になっている。新宿 2 丁目の商業施設との連携はデリヘルプロジェクトを通じて形成されつつある。今後は各店舗の顧客への認知の向上を図るために、アウトリーチする啓発資材の工夫や、各店舗へのアプローチ方法を工夫する予定である。また、デリヘルプロジェクトはハッテン場プロジェクトともリンク

して、ハッテン場へのアウトリーチや連携作りにも拡大していく予定である。

Living Together 計画は NPO 法人「ぷれいす東京」」が「感染者と共に生活する」をテーマに akta で展示会を開催したことから始まったプロジェクトである。ぷれいす東京発刊の小冊子「Living Together」の写真を撮影した写真家による展示や、感染者やその家族、友人が綴った手記の展示やリーディングの会から始まった。その後は、Rainbow Ring も協力して、ライトミュージックの生演奏とリーディングを合わせたイベント「Living Together Lounge」を毎月開催している。「Living Together Lounge」は、ミュージシャンとリーディングを依頼した著名人、イベント会場のスタッフとの共同作業で成り立っている。毎回 50 人以上の来場者があり、セクシュアリティを超えて大きな感慨を与えている。既存のイベントが多い東京においても「Living Together Lounge」は新しい形態の啓発イベントであり、これからの認知とそれに伴う効果を期待している。

ゲイコミュニティ、NGO との協力関係や信頼関係の構築は HIV 感染拡大防止を進めていく上で重要である。akta を拠点とした啓発ネットワークが拡大し、ゲイコミュニティにアプローチする啓発体制が推進されつつあり、訴求性のある啓発資材の開発と普及方法に一定の成果を得ていると考える。MSM に訴求性の高い啓発資材を開発し、効果性の高い啓発普及手法を構築することは、HIV/AIDS が増加している現状へのエイズ対策として貢献するものと考える。

E. 結語

東京地域では、ゲイバーとの協力によるコンドームアウトリーチ、クラブイベントでの啓発、ハッテン場との協力による啓発、また東京都との協働による若者向けやハッテン場向けの講習会などのプログラムを行った。当事者参加の予防啓発は、訴求性の高い啓発資材、啓発方法を具体化し、ゲイコミュニティとの連携を推進した。その基盤として予防啓発のための拠点 akta の存在が大きく、当事者のもとでコミュニティに開かれた場として運営されていることが背景にある。さらに啓発活動を維持しているデリヘルボーイのアウトリーチは商業施設との連携を高め、加えてゲイ雑誌等のメディアからの支援、クラブイベントの主催者との連携、NPO 法人ぷれいす東京との協働などが、啓発普及を一層に促進するものとなっている。

F. 研究発表

論文発表

(欧文)

1) Yutaka Matsuyama, Takuhiro Yamaguchi, Shuji Hashimoto, Miyuki Kawado, Seiichi Ichikawa, Tamami Umeda, and Masahiro Kihara: Epidemiological Characteristics of HIV and AIDS in Japan based on HIV/AIDS Surveillance Data: An International Comparison, The J. AIDS Research, 2004, 6(3), 184-193

2) Shuji Hashimoto, Miyuki Kawado, Yoshitake Murakami, Seiichi Ichikawa, Hirokazu Kimura, Yoshikazu Nakamura, Masahiro Kihara and Kazuo Fukutomi: Numbers of People with HIV/AIDS reported and Not reported to Surveillance in Japan, J.Epidemiol, 2004, 14(6), 182-186

3)Masahiro Kihara, Masako-Ono Kihara, Mitchell D. Feldman, Seiichi Ichikawa, Shuji Hashimoto, Akira Ebosida, Taro Yamamoto, Mitsuhiro Kamakura : HIV/AIDS Surveillance in Japan, 1984-2000; JAIDS, 2003、32, s55-s62

(和文)

1)日高庸晴、市川誠一、木原正博:ゲイ・バイセクシュアル男性の HIV 感染リスク行動と精神的健康およびライフイベントに関する研究、日本エイズ学会誌、2004、6(3)、165-173

2)市川誠一:ゲイコミュニティとエイズ対策、公衆衛生、2003、67(12)、930-934

3)市川誠一:MSM(Men who have sex with men)における HIV 感染予防介入—プロジェクト MASH 大阪について、日本エイズ学会誌、2003、5(3)、174-181

4)橋本修二、福富和夫、山口拓洋、松山 裕、中村好一、木村博和、市川誠一、木原正博:HIV 感染者数と AIDS 患者数のシステム分析による中長期展望の試み、日本エイズ学会誌、2002、4(1)、8-16

5)市川誠一、木原雅子、木原正博:エイズ啓発を振り返って、日本性感染症学会誌、2002、13(1)、26-31

6)山口拓洋、橋本修二、川戸美由紀、中村好一、木村博和、市川誠一、松山 裕、木原正博、白阪琢磨:エイズ治療の拠点病院における HIV/AIDS の受療者数、日本エイズ学会誌、2002、4(3)、91-95

口頭発表 -国内

1) 佐藤未光、今井敏幸、張由紀夫、木村博和、市川誠一：コミュニティセンター「akta」の活動と利用状況について、第 18 回日本エイズ学会総会、2004. 12、静岡

2) 張由紀夫、今井敏幸、佐藤未光、木村博和、市川誠一：コミュニティセンター「akta」の運営における工夫と課題、第 18 回日本エイズ学会総会、2004. 12、静岡

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業
男性同性間のHIV感染予防対策とその推進に関する研究

名古屋における男性同性間のHIV感染予防対策とその推進

分担研究者:内海 眞(高山厚生病院/名古屋医療センター客員研究員)
研究協力者:Angel Life Nagoya

研究要旨

最新のエイズ動向委員会の報告によれば、平成16(2004)年一年間の新規HIV感染者及びエイズ患者の報告総数はこれまでのどの年よりも多く1114人で、かつ男性同性間の性的接触による感染が優位であった。この傾向は名古屋医療センターの患者動向調査でも同様で、男性同性間の性的接触によるHIV感染の予防対策の立案とその実践が依然として重要かつ喫緊の課題となっている。

名古屋地域においては、平成12(2000)年に男性同性愛者(MSM)の人達によって、HIV感染の予防と感染者のサポートを目的とするCommunity Based Organization(CBO)であるAngel Life Nagoya(ALN)が立ち上げられた。このグループは、MSM間のHIV感染拡大に危機感を抱き始めた名古屋医療センター(旧国立名古屋病院)の医療者と自然な形で協働関係を構築し、当事者の視点からなる予防啓発活動に取り組んできた。これまでの活動内容の主なものは以下の通りである。

1)予防啓発パンフレットとポスターの配布、2)インターネットを介した予防啓発、3)月1回のHIV/STD勉強会の開催、4)メッセージ付コンドームのゲイバーとハッテン施設への配布とその消費動向調査、5)性とHIV感染症に関する意識調査、6)無料HIV抗体検査会と啓発イベントの同時開催、7)静岡における予防啓発活動の支援、8)予防啓発映画の作製、9)名古屋における他のエイズ予防啓発団体との協働、10)啓発拠点の設置と広報活動。

本報告では、ALNと医療者との連携の経緯とこれまでの成果の概略、ならびに上記3)4)6)9)10)の平成16年度の成果について述べる。勉強会は2000年6月から毎月第3日曜日に開催し、現在まで継続している。

勉強会は基本的知識の習得と高度な知識の習得の2部構成で、毎回25～35名の参加者がある。メッセージ付コンドームを30軒のゲイバーと4箇所のハッテン施設に配布しており、最近ではハッテン施設が自主的にコンドームを用意するようになった。16年度の第4回無料HIV抗体検査会には439名の受検者が訪れ、そのうち12名にHIV感染症の早期診断がなされ、医療機関に紹介された。本検査会におけるHIV検査は、イムノクロマト法、PA法、p24抗原測定、ウエスタンブロット法、HIV-RNA定量を組み合わせたもので、感度ならびに精度の観点からも誇れるものと自負している。前2法のスクリーニング検査で擬陽性が18例認められた。平成16年12月1日の世界エイズデーには名古屋市のいくつかのCBO/NGOと協力し、市内の中心街をコンドームや啓発パンフレットを配布しながらパレードを行った。初めての試みで、250名以上の参加者があった。8月1日には名古屋市のゲイバーが比較的多く集まっている地域に、啓発の拠点でもあり、MSMの人達が気軽に立ち寄れる「3N:Nagoya Nagoyaka Navigation」と名づけられた小さなセンターが開設された。多い月には88名に及ぶ来訪者があった。

名古屋における予防啓発推進組織は、予防の対象となる集団の中から生まれ(ALN)、予防啓発に必要な関係者や協力者を巻き込みながら緩やかな協働組織を形成し、活動を継続してきた。一方ではMSMに特化した予防啓発活動を推進しつつ、他方では他のグループとも協働し一般向けの予防啓発活動にも参加し始めている。後者の活動は前者の予防啓発に役立つとともに、今後のより広範な予防啓発活動の新たな展開に資するこ

と大であると考えている。

ただし、名古屋医療センターの患者動向調査によれば、依然として新規HIV感染症患者は増加傾向にある。しかも、その多くはMSMの人達である。新規HIV感染症患者の増加は、検査の普及による早期診断患者の増加であれば意味あることであるが、必ずしもそうとは言い切れない。1999年、2000年、2003年、2004年のそれぞれに名古屋医療センターを受診した新規患者の平均CD4値と中央値はともに決して上昇しておらず、むしろ低下しているからである。新規HIV感染症患者の中でエイズ患者の占める割合は、増加こそすれ減少していない。我々の活動は未だ目的を達成しておらず、今後は我々自身の活動内容を反省しつつ、新たな方法による予防啓発を開発して行かねばならないと考える。

A. 研究目的

最新のエイズ動向委員会の報告によれば、平成16(2004)年一年間の新規HIV感染者およびエイズ患者の報告数は過去最高の1114人で、かつ男性同性間の性的接触による感染が第1位を占めていた。この傾向は名古屋地区の多くのHIV感染症患者が集まる名古屋医療センターの患者動向調査でも同様で、名古屋地区においても男性同性間の性的接触によるHIV感染の広がりが顕著であり、HIV感染の予防対策の立案とその実践がますます重要かつ喫緊の課題となっている。

本報告では、名古屋地区における平成16年度の男性同性愛者(MSM:Men who have Sex with Men)を対象にしたHIV感染予防対策の内容と成果を報告する。

B. 研究方法

本研究は、名古屋地区在住のMSMによりHIV感染症の予防と患者のサポートを目的に設立されたCommunity Based Organization(CBO)であるAngel Life Nagoya(ALN)と協働して行われた。

研究方法は、MSMの視点からHIV感染予防に有効と思われる対策をまず立案し、それを実践し、その後その対策の有効性を判定するものである。有効性の判定は、最終的には新規HIV感染症患者の減少の有無によってなされることになるが、研究の初期段階では新規エイズ患者の減少の有無でなされると考えられる。新規感染者数およびエイズ患者数の動向は名古屋医療センターの患者動向調査結果を用いた。

16年度に実践した予防対策は以下の通りである。

1) 月1回のHIV/STD勉強会の開催
2) メッセージ付コンドームのゲイバーとハッテン施設への配布とその消費動向調査
3) 無料HIV抗体検査会と啓発イベントの同時開催
4) 名古屋における他のエイズ予防啓発団体との協働
5) 啓発拠点の設置と広報活動

C. 研究結果

1) 月1回のHIV/STD勉強会の開催

勉強会は毎月第3日曜日の15時から17時までの2時間をかけて開催した。勉強会の構成は2部からなり、前半は初参加者のための基礎知識の習得、後半は再参加者のための高等知識の習得を目指した。参加者は毎回25~35名であった。ただし、新規参加者は毎回数名と少なく、大部分はALNのメンバーと定期的参加者で占められた。

2004年度の勉強会のテーマを資料1に示す。当初は知識の習得を目的としたが、最近はできる限り自分で思考し、セイファーな行動に反映されるような形の勉強会を目指している(資料2、3)。

2)メッセージ付コンドームのゲイバーとハッテン施設への配布とその消費動向調査

30軒のバーと4軒のハッテン施設に配布した。バーに配布したコンドームの1軒あたりの平均消費量の累積数を資料4に示す。ハッテン施設では店舗自身がコンドームを購入かつ配布するようになり、配布数は従来の数より半減した。

3)無料HIV抗体検査会と啓発イベントの同時開催

平成16年6月5日と6日の二日間にわたって無料

HIV 抗体検査会と HIV 感染症の予防啓発を呼びかけるイベント(NLGR2004:Nagoya Lesbian and Gay Revolution 2004)を開催した。

無料抗体検査会は6月5日(土)午前10時から午後8時までと、6日(日)午後1時から8時まで、イベント会場の中心に位置する池田公園前のホテル(ホテルセントメイン名古屋)の 2、3 階を借り切って実施した。前日は、受検者は受付で ID カードを受け取り、平均約 10 分間の検査前オリエンテーションを受け、インフォームド・コンセントを得た後に採決を受けた。翌日東海地区の医師から結果を通知された。結果通知後のカウンセリングを必要とする受検者は、専門のカウンセラーによるカウンセリングを受けた。また、医療機関を受診する必要のあった受検者は、結果通知医師から医療機関への紹介状を受け取った。

検査項目は、抗 HIV 抗体、HBs抗原、TPHA 抗体の3種類であった。抗 HIV 抗体のスクリーニング検査としては、イムノクロマト法とPA法を併用し、確認検査としてウエスタンブロット法を用いた。なお、P24 抗原の測定を必要に応じて実施するとともに、スクリーニング検査で陽性、擬陽性となった全ての検体で PCR 法によるウイルスの定量検査を実施した。

受付人数の総数は476名で、そのうち439名が実際に受検した。結果通知を受けた人数は417名であった。

HIV 陽性者は 12 名(2.7%)で、偽陽性者は 18 名(4.1%)であった。HBs抗原陽性、TPHA 陽性者はそれぞれ10名(2.3%)、81名(18.5%)であった。

検査終了後にアンケート調査を実施した。回答者は364名であった。年齢分布は資料5に示す通りで、20 代、30 代が大半を占めた。来場者の地域別内訳は資料6の通りで、名古屋市を含む愛知県在住者が6割近くを占め、東海4県在住者が約3/4を占めた。検査会に対する評価は概ね良好であった(資料7)。新規参加者と複数回参加者はそれぞれ185名と179名でほぼ同数であった。過去に HIV の検査を受けたことのある人は 364 名中 226 名(62%)であった(資料8)。逆に残りの 138 名(38%)は今回の無料抗体検査会が初めての HIV 抗体検査の受検機会となった。これまでに HIV 抗体検査を受けた場所もしくは施設(複数回答可)では、これまでに行われた NLGR での検査が最も多く154名であり、ついで保健所の94名であった。過去1年間に検査を受けた人は 160 名(44.0%)で、受検場所についてはやはり NLGR が最も多かった(資料9)。現行の保健所における HIV 抗体検査については、その存在を知らない人がわずかではあるが存在したことと、夜間検査が実施されていることを知らない人が半数近く存在していることが判明した(資料 10)。また、保健所での検査を受けにくいと回答した人が245名の67.3%を占めた。その理由としては、結果通知までの時間が長い、検査日がわからない、検査時間が限られている、場所と時間が限られる、といった理由が多かった(資料 11)。

イベント会場でもアンケート調査を実施した。そのうち、今回の検査会で検査を受けるかどうかという問いと、過去の受検歴を問うた設問に対しては資料 12、13 の結果を得た。回答者 435 人のうち、今回受検する人は 134 名(30.8%)であった。また、これまで検査を全く受けたことのない人が144名(33.1%)存在した。

4)名古屋における他のエイズ予防啓発団体との協働

12 月 1 日(水)の世界エイズデーの夜に、名古屋地区で HIV 感染症の予防や患者支援を行っている複数の団体と協働で、エイズでなくなられた方々の追悼と HIV 感染症の予防啓発を目的に集会とパレードを実施した。共催団体は、ALN の他に CAN DO-NET エイズ、ASK-NET、CAST、JAPANetwork、PLUS、の合計 6 団体で、愛知県、名古屋市、エイズ予防財団、名古屋医療センター、愛知県内科医会、愛知県薬剤師会、愛知県女性薬剤師会、愛知県臨床衛生検査技師会の後援を得た。その他、18 に上る企業・団体の協賛と多数の個人協賛を得ることができた。参加者は 250 名を超えた。パレードをしながら、HIV 感染症の情報を掲載したパンフレットを配布した。

5)啓発拠点の設置と広報活動

前述の池田公園の近くに存在するビルの地下1階に、平成16年8月1日 Nagoya Nagoyaka Navigation : 3N と名づけられたコミュニテイーセンターを開設した。オープン時間は木・金が午後 8 時から 11 時、土・日

が午後 2 時から 8 時までである。HIV 関連情報発信の拠点として機能することを目的に設置された。内部の様相は資料 14 に示す。各種啓発資材、コンドームが入手でき、インターネットは常時利用可能とした。来場者数は資料 15 の通りである。

6)名古屋医療センターにおける患者動向

平成 16 年 12 月 31 日における名古屋医療センターの累積HIV感染症患者総数は380名である。感染経路別では男性間性的接触によるものが 187 名と約半数を占めた。さらに、不明の 50 名の多くは男性間性的接触によるものと推測すると、過半数が男性間性的接触による感染と考えられる。平静 16 年 1 年間の新規 HIV 感染症患者は 85 名とこれまでの最高値となった。85 名のうち男性間性的接触による感染の明らかな者は 61 名(71.8%)にものぼり、名古屋地区においても全国の傾向と同じくますます男性同性間性的接触による感染が広がっている。

MSM の HIV 感染症患者の増加は、これまでの男性同性間の感染予防対策が有効でなかったことを物語る。しかし、MSM の HIV 感染症患者の増加が検査の普及による早期発見によるものであるのなら、これまでの対策は有効であったと考えられる。

そこで、ALN が立ち上がり、名古屋医療センター(旧国立名古屋病院)の医療者と協働で MSM を対象にした HIV 予防啓発が開始された 2000 年とその前年、および2003年、2004年に名古屋医療センターを受診した新規 HIV 感染症患者の初診時におけるエイズの割合と初診時の CD4 値を比較検討してみた。1999、2000、2003、2004 年の各々1年間における新規 HIV 感染症患者の数は、25、27、72、85 名で、そのうち初診時エイズ発症者はそれぞれ5(20%)、6(22%)、21(29%)、21(25%)とむしろ後 2 年間の方が高値であった。CD4 値を同様に比較検討した結果を資料 16 に示す。CD4 値は平均値、中央値ともに後半の 2 年間の方が低値となっている。同じ比較検討を MSM の新規患者に限定して行っても傾向は全く同じであった(資料 17)。

D. 考察

平成 16 年度に主に実施された予防啓発対策は次の 5 点である。すなわち、1)月 1 回の HIV/STD 勉強会の開催、2)コンドームの配布、3)無料 HIV 抗体検査会と啓発イベントの開催、4)名古屋地区の他のエイズ予防啓発団体との協働、5)啓発拠点の設置と広報活動。本考察ではそれぞれの活動を評価するとともに、これらの予防対策活動が名古屋地区の MSM 全体の予防啓発につながっていたのかどうかを名古屋医療センターの患者動向調査結果をもとにして検討した。

まず、勉強会については2000年6月から継続しており、しかも毎回 30 名前後の参加者が存在した。ALN の勉強会担当者の努力の賜物であると考える。継続はいつの日か必ず理解とよい評価を得ることにつながると期待される。勉強会の構成も実践の中で工夫がなされており、最終的には行動変容を生じさせることを目標としている。実際に感染をするとどのような困難な生活があるかを学ぶことによって行動変容を期待している部分もあるが、これは ALN に HIV 感染者が複数存在し、その人たちの生の声を反映したものである。エイズならびに HIV 感染症に対し過度の恐怖心を与えることは好ましくないが、HIV 感染症患者の生活上の実際を知ることは、病気に対する理解のみならず、患者に対する理解にもつながると考えられる。地道な活動であるが、今後も継続していきたい。

コンドーム配布も 2000 年 6 月から継続している地道な活動である。バー1 軒あたりの平均消費量は 1 ヶ月 20 個弱であった。決して多い量ではないが、セイファーセックスに対するメッセージの継続的な伝達と言う点で意味ある活動と考えている。10 代〜20 代前半の客層の多いバーにおけるコンドーム消費量が 6 月以降に伸びているが、6 月に行われた NLGR の影響があるのかもしれない。一般的にトイレにコンドームを設置したバーの消費量の方がやや高い傾向を認めた。設置場所に対する配慮も必要と考えられた。ハッテン施設にはこれまで 1 ヶ月 2000 個のコンドームを配布していたが、最近では施設側が自主的にコンドームを用意してくれるようになり、配布量が半減した。コンドーム使用に対する理解が浸透してきた結果であり、好ましい傾向と思われる。こうした結果が得られ

たのも、コンドーム配布を継続的に実施してきたためと推測している。

4 回目の無料 HIV 抗体検査会を実施した。これまでの最高の 439 名が受検した。本検査会が多くの MSM に浸透しかつ理解されてきた結果と思われる。

HIV 陽性者は 12 名で、早期診断の機会となりえた。同時に行った TPHA 検査では陽性者が 81 名の多数に上った。性感染症が MSM の間に広がっていることを裏付けるデータであり、セイファーセックスのさらなる一層の呼びかけが必要と考えられた。

受付をしながらも受検しなかった人たちが 30 名以上存在したし、来場したが待ち時間が長いために受付をしないで帰ってしまった人たちが 30~40 名存在した。検査を希望しながら時間の都合がつかず受検しなかった人たちである。待ち時間をできるだけ少なくする工夫が必要である。今回はオリエンテーションの部屋を 10 用意したが、次回からは部屋数を大幅に増やし、ニーズに応えていかねばならない。

本検査会では HIV 検査のスクリーニング検査としてイムノクロマト法と PA 法を併用した。スクリーニング検査の段階で擬陽性を 18 名(4.1%)に認めた。これまでに発表されている擬陽性の頻度に比べ少し高い傾向を認めた。スクリーニング検査だけでは確実な診断がされないケースが一定数存在するわけで、この点に対する十分な注意が必要とされる。本検査会では確認検査として通常のウエスタンブロット法に加え、PCR 法によるウイルス定量検査も実施した。本検査会の HIV 検査は、感度並びに精度に関して最も優れたものと自負している。

本検査会に複数回参加された人たち(リピーター)を約半数に認めた。繰り返し検査を受けた人たちの背景分析はなされていないが、セイファーセックスが実践されてないことも理由のひとつとして推測される。次回からはリピーターの背景を調査することと、背景因子に応じた個別的対応を考えていかねばならない。

これまでに HIV 検査を受けたことがあるかどうかについて問うてみたところ、364 人中 226 人が受検歴ありと答えた。受検場所で最も多いのが過去の NLGR の検査会であった。この傾向は過去一年間の受検歴を調査した結果とも一致していた。NLGR の検査会への参加者の多くは、保健所などで日常的に行われている HIV 検査を利用するよりも、NLGR の検査会を選択する傾向があると考えられた。保健所における検査は利用しにくいと答えた人が 67.3%存在することと合わせると、本検査会は現行の検査施設に行きにくい人々の受け皿として機能している側面があると考えられる。このことは一面では本検査会に意味を与えるものであるが、他面では現行検査体制の改善を強く求める結果とも考えられる。今後は現行検査体制の問題点を抽出し、その改善に取り組んでいくとともに、本研究班として現行の検査体制に対する広報の支援に努めていかなければならない。

364 人中 226 人に受検歴を認めたが、このことは 138 人(37.9%)が今回の検査会で初めて HIV 検査を受けたことを示している。本検査会が多くの新規受検者の検査の機会になっている事実は、本検査会を継続することを支持する根拠となろう。

保健所の無料検査に対する認知度も十分なものではなかった。特に夜間検査が実施されていることを未だ知らない人が多数存在した。保健所における HIV 検査の広報がさらに必要であると考えられる。

NLGR での無料 HIV 抗体検査に関しては、高いニーズに応えられたこと、早期診断の機会になりえた点で、意義があったと思われるが、問題点も少なからず存在する。第 1 点は受験者がグループで来場されるケースが多く、その際グループ内のあるメンバーには検査が強要される状況が存在すること、第 2 点は採血の際に針刺し事故による感染が成立した場合に採血者に対する補償が全くできないこと、第 3 点は NLGR などの活動は名古屋医療センターの新規 HIV 感染症患者の減少には何ら影響を及ぼしていない点である。第 1 点については、特に結果通知の際にはグループではなく個人で聞きに来るよう呼びかけているが限界がある。オリエンテーションの部分と結果通知のところで工夫を凝らす必要があると思われる。第 2 点は現時点では、すなわち研究班の事業としてボランテイアの医療者に採血をお願いする形態では解決策はない。この問題をクリアするひとつの方法は、本検査会を地方自治体の事業とすることである。す

なわち、採血を業務として位置づけ、もし感染事故が起こった場合は労災として認定することである。もちろん研究班としても従来通りの応援をすることは言うまでもない。第 3 点は、2000 年から開始された ALN と名古屋医療センターの医療者による MSM を対象にした予防啓発活動(本検査会も含む)が、名古屋医療センターの新規 HIV 感染症患者の減少に結びついていない事実である。むしろMSMのHIV感染症患者は増加傾向にある。もちろん、この増加分が検査の普及によってもたらされたものであれば我々の活動の効果として考えられるが、エイズ患者は相変わらず 25%前後を占めているし、2004 年 1 年間の新規患者の初診時 CD4 値はむしろ以前より低下している。すなわち、名古屋医療センターの新規患者数の増加は検査の普及によって感染早期の HIV 感染症患者が増加したためではないと結論付けられる。我々の活動は未だ明確な効果を挙げてはいない。ただし、我々の活動は開始してから 5 年にも満たない。上記方法による効果判定法が本当に適切であるかどうかも不明である。しかしながら、これまでの活動に対する反省は絶えずなされなければならないし、新たな予防啓発対策の立案と実践がさらに必要と考える。

本検査会とイベントは池田公園周囲の地域の方々の理解と協力の上に成り立っている。使用を許可してくださったホテルのオーナー並びにスタッフの方々の配慮には深く感謝しているし、関係町内の人々の応援もありがたい。こうした周囲の人々の理解は我々の活動を支えてくれるのみならず、HIV 感染症の理解の広がりにつながると期待される。

12 月 1 日の世界エイズデーの夜に、名古屋地区でHIV感染症の予防や患者支援を行っているいくつかのグループと協働で、HIV 感染症の予防啓発とエイズで亡くなられた方の追悼を目的に集会とパレードを行った。250 名を超える参加者があり、初めての試みとしては成功と考えられた。ALN が他の HIV 感染症の予防啓発団体と協働して活動を行うことは意味あることと考える。一つは予防啓発の方法に関する情報交換の場になること、従ってそれぞれの団体の活動の幅を広げることにつながること、二つ目として ALN の活動(例えば NLGR)の一部に他の団体の支援を得ることによって規模の拡大と内容の充実につなげることが期待できること、三つ目として HIV 感染症に対する予防啓発活動全体のレベルと規模の向上に役立つと考えられること、等があげられる。今後も積極的に協働活動に参加していくことが望まれる。

2004 年 8 月 1 日に名古屋市の池田公園近くのビル地下一階に「3N」と名づけられた啓発拠点を開設した。HIV 感染症／エイズに関する情報発信の機能を持たせるとともに、気軽に立ち寄れ上記情報やコンドームを入手する場として、またHIV関連の集会や情報交換などの場として利用してもらうことが期待されている。利用者数は未だ必ずしも多いというわけではないが、利用者はコンスタントに来場している。3N に対する広報活動を広げるとともに、利用価値のある場とするためのさらに一層の工夫が必要である。

E. 結 語

平成 16 年度の予防啓発活動として、以下のものを実践した。

HIV/STD 勉強会の定期的開催、コンドームのバーとハッテン施設への配布、無料 HIV 抗体検査会と啓発イベントの同時開催、他のエイズ予防啓発団体との協働、啓発拠点の開設と運営、の5活動である。

それぞれの活動は一定の成果を生み出したが、名古屋地区におけるMSMの新規HIV感染者や新規エイズ患者の減少という形では未だ結実していない。従って、我々の現行の活動に対し絶えず批判と反省を加えなければならないし、新たな予防啓発活動の立案と実践に取り組まなければならない。

F. 発表論文等

[論文発表]

1. Oki T, Usami Y, Nagai M, Sagisaka M, Ito H, Nagaoka K, Yamanaka K: Pharmacokinetics of Lopinavir after administration of Kaletra in healthy Japanese volunteers. Biol. Pharm. Bull. 27: 261-265, 2004.
2. Wada K, Nagai H, Hagiwara T, Ibe S, Utsumi M, Kaneda T: Delayed HIV-1 infection of CD4$^+$ T lymphocytes from therapy-naïve patients

demonstrated by quantification of HIV-1 DNA copy numbers. Microbiology & Immunology 48: 767-772, 2004.

[学会発表]

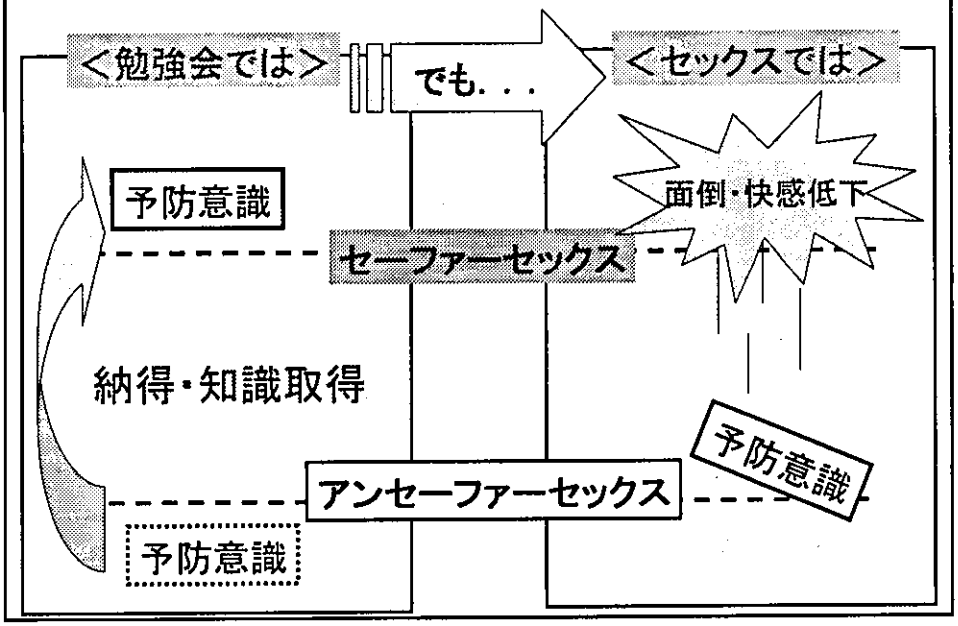
1. 服部純子、内山雅宇、加藤　稔、濱口元洋、西山幸廣、金田次弘:HIV-1 感染患者における G 型肝炎ウイルス(GBV-C)重複感染の影響、第 18 回日本エイズ学会総会、平成 16 年 12 月 9-11 日、静岡
2. 菊池恵美子、濱口元洋:HIV 感染による死の希求から感染者としての生の継続希求への変化、第 18 回日本エイズ学会総会、平成 16 年 12 月 9-11 日、静岡
3. 日比生かおる、三和治美、山田由美子、濱口元洋:名古屋医療センターにおける HIV 検診のあり方と意義について考える～受検者の背景と相談内容を調査・分析して、第 18 回日本エイズ学会総会、平成 16 年 12 月 9-11 日、静岡
4. 内海　眞、濱口元洋、菊池恵美子、河村昌伸、五島真里為、市川誠一:同性愛者を対象にした名古屋での無料 HIV 抗体検査会、第 18 回日本エイズ学会総会、平成 16 年 12 月 9-11 日、静岡
5. 奥村直哉、大久保重則、林　誠、日比生かおる、三和治美、間宮均人、濱口元洋:初回治療にアタザナビルを使用した 1 症例、第 18 回日本エイズ学会総会、平成 16 年 12 月 9-11 日、静岡
6. 安岡　彰、鳴河宗聡、峯村信嘉、間宮均人、山中克郎、濱口元洋:新規プロテアーゼ阻害薬 atazanavir による高ビリルビン血症、第 18 回日本エイズ学会総会、平成 16 年 12 月 9-11 日、静岡
7. 永井裕美、和田かおる、照沼　裕、水野善文、多和田行男、間宮均人、内海　眞、濱口元洋、とう学文、伊藤正彦、西山幸廣、金田次弘:種々の感染病態における末梢 CD4 陽性 T リンパ球内の HIV-1 レベル、第 18 回日本エイズ学会総会、平成 16 年 12 月 9-11 日、静岡
8. 小柏　均、永井裕美、水野善文、堀　洋美、加藤　稔、多和田行男、玉村和栄、間宮均人、濱口元洋、金田次弘:MSG (major surface glycoprotein) gene を用いた Real-time PCR 法による Pneumocystis jirovecil 迅速定量法の確立、第 18 回日本エイズ学会総会、平成 16 年 12 月 9-11 日、静岡
9. 山本直彦、森下高行、佐藤克彦、金田次弘、伊部史朗、永井裕美、内海　眞、宮城島拓人:ケニアにおける未治療 HIV 感染者の薬剤耐性遺伝子とサブタイプの流行状況について、第 18 回日本エイズ学会総会、平成 16 年 12 月 9-11 日、静岡

資料1　HIV予防啓発勉強会

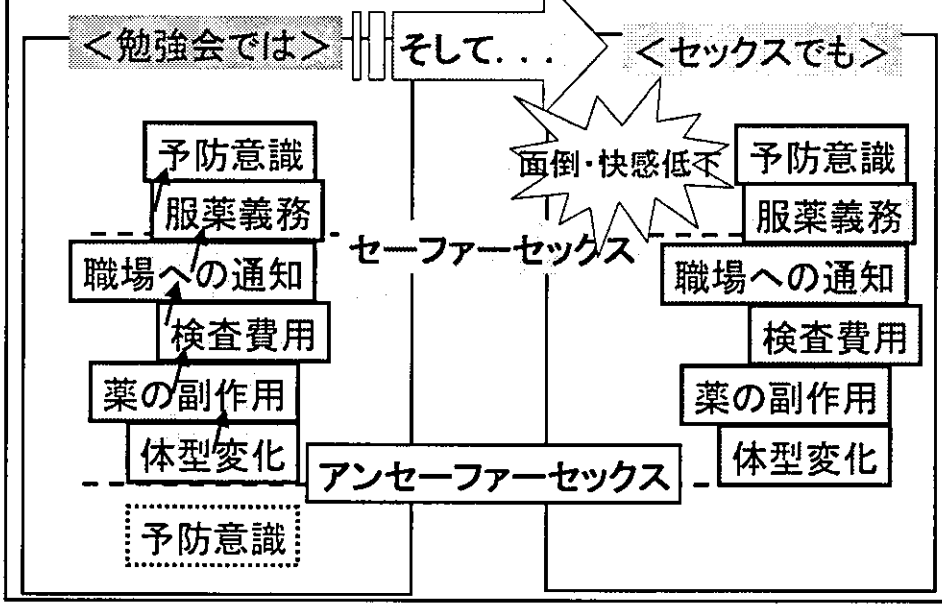
2004年度

- 4月18日:「他のNGOの予防活動紹介」
- 5月16日:「ゲイセックスの経路別STI感染予防」
- 6月20日:「NLGR2004抗体検査の結果と問題点」
- 7月18日:「再びHIVとAIDSの基礎知識」
- 8月15日:「LIVING TOGETHER manualより」
- 9月19日:「迅速検査の意義とその問題点」
- 10月17日:「アフリカのHIV 感染者の現状」
- 11月21日:「LIVING TOGETHER LETTERSより」
- 12月19日:「Life Guardより経路別感染の可能性」

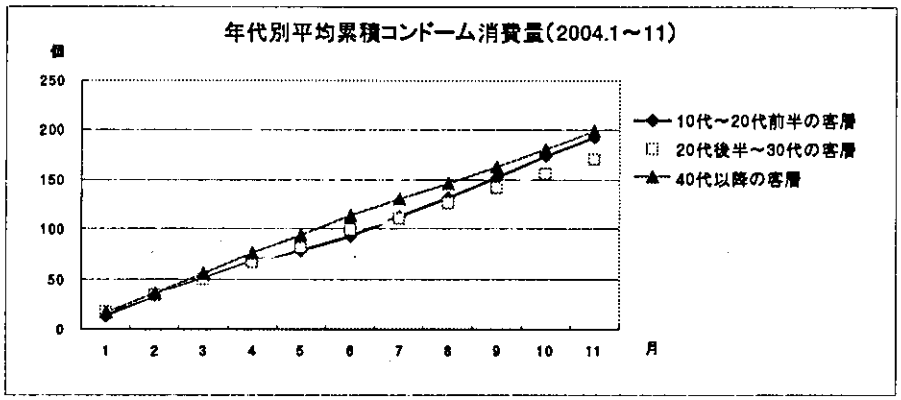
資料2　知識取得でいいの？



資料3　自分で思考



資料4　コンドーム消費動向



- 10代～20代前半の消費の伸びは6月以降＝NLGR2004の効果？
- 40代以降と20代後半～30代の消費の差はコンドームの設置場所の影響
  - ★トイレ内かカウンター上かの違い←経営者に強制はできない
- 消費率≠使用率の評価・対応策が課題